

JPCOARによる 研究データマネジメント 人材の育成と研究データ に関する取組について

JPCOAR研究データ作業部会主査

(北海道大学附属図書館研究支援課)

結城 憲司

本日の内容（40分）

1. JPCOARの取組（25分）

【人材育成】

- ① RDM教材の開発（研究データ作業部会）
- ② JPCOARの研修（人材育成作業部会）

【研究データに関する取組】

- ① データベースレスキュープロジェクト（研究データ作業部会）
- ② RDM事例形成プロジェクト（研究データ作業部会、AXIES-RDM部会との連携）
- ③ JPCOARスキーマ（コンテンツ流通促進作業部会）

2. AXIES-RDM部会の取組（5分）

- ① 「学術機関における研究データ管理に関する提言」
- ② RDMアンケート雛形作成とRDMアンケートの試行

3. 国大図協OA委員会の取組（5分）

- ① 「機関リポジトリの再定義について」
- ② 「オープンサイエンスに向けて国立大学図書館が担う具体的役割」
- ③ 2019年度の2つの取組

4. 質疑応答（5分）

JPCOAR（ジェイピーコア）とは



オープンアクセスリポジトリ推進協会
Japan Consortium for Open Access Repository : JPCOAR

オープンアクセスリポジトリ推進協会(JPCOAR)は、国内の大学・研究機関が力を結集し、
オープンアクセスの発展に向けた課題の解決に共同で取り組んでいく拠点です。

J P C O A R
オープンアクセスリポジトリ推進協会

オープンアクセスリポジトリ推進協会 (JPCOAR : Japan Consortium for Open Access Repository)

- ・国公立大学図書館協力委員会と国立情報学研究所（NII）の間の連携・協力協定に基づき、2016年7月に設立したコミュニティ
- ・目的：リポジトリを通じた知の発信システムの構築を推進し、リポジトリコミュニティの強化と、我が国のオープンアクセス並びにオープンサイエンスに資すること
- ・JAIRO CloudをNIIと共同運営
- ・参加機関：629機関（2020年1月14日現在）

オープンアクセスリポジトリ戦略 2019～2021年度

- ① オープンサイエンスの推進に寄与するため、研究データの公開、流通に関する先導的な取組みを行う。（研究データ作業部会）
- ② オープンアクセスを推進する学術情報流通の基盤を整備し、コンテンツの流通、活用を促進する。（コンテンツ流通促進作業部会）
- ③ オープンアクセスリポジトリを支えるコミュニティとしての機能を強化する。（コミュニティ強化・支援作業部会）
- ④ オープンアクセス、オープンサイエンスの推進に対応できる人材育成を行う。（人材育成作業部会）
- ⑤ 協会の活動基盤を強化し、JPCOARのブランド力を高める。（運営委員会）

統合イノベーション戦略について の见解（2018年8月2日）

「統合イノベーション戦略」（2018年6月15日閣議決定）に対し、
JPCOAR運営委員会として見解を表明

オープン・アンド・クローズ戦略の中でも、主としてオープンの部分を担い、当面は以下の点に優先的に取り組む。

- ① NIIとのJAIRO Cloudの共同運営
→オープンサイエンスの進展を想定した機能強化
- ② 国際標準に準拠し研究データにも対応した次世代メタデータスキーマ「JPCOAR スキーマ」の普及
→公開する研究データの機械判読可能性や相互運用性を確保・支援
- ③ RDM トレーニングツールの開発・普及・利用促進
→研究者や研究支援職員の意識・スキルの向上

JPCOARによる人材育成

RDMに関する教材開発

DL=ダウンロード数
(~2019年1月27日現在)

J P C O A R
オープンアクセスリポジトリ推進協会

2015

2016

2017

2018

2019

機関リポジトリ推進委員会

JPCOAR

日本向け教材「RDMトレーニングツール」
の開発

2017.6 「RDMトレーニングツール」
公開 6,874 DL

↳ 2017.11-2018.1 JMOOC/gaccoにて
「オープンサイエンス時代の研究データ管理」開講
受講者数2,305名（修了率25%）

2018.8 新教材「研究データ管理サービ
スの設計と実践」の公開
4,207DL

↳ 2018.8-10 新教材
試用プロジェクト
参加機関数18

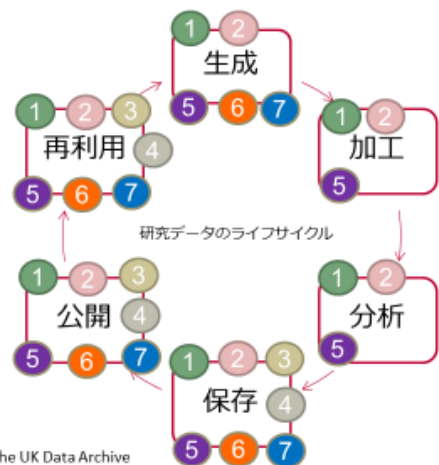
2019.9-12 学認LMS
によるオンライン講
座試験運用
参加機関数22

2016.4 NISOによる入門書
「研究データ管理」の日本語訳公開
<http://id.nii.ac.jp/1280/00000195/>
1,304 DL

2019.10- 若手研究
者向け教材の開発

最初の教材「RDMトレーニングツール」

研究データのライフサイクルと
本コンテンツとの関わり



• The UK Data Archive
(<http://www.data-archive.ac.uk/create-manage/life-cycle>)
• RDM Support - basic training course for information specialists
(<http://dx.doi.org/10.6084/m9.figshare.1285313>) より

- ① 1章 導入
- ② 2章 データ管理計画
- ③ 3章 保存と共有
- ④ 4章 組織化、文書化、メタデータ作成
- ⑤ 5章 法・倫理的問題
- ⑥ 6章 ポリシー
- ⑦ 7章 研究データ管理サービスの設計

J P C O A R
オープンアクセスリポジトリ推進協会

目的

- ・ RDMに関する基礎的な知識を習得
- ・ RDMサービス構築の足掛かりに

内容

- ・ 全7章から構成されるeラーニング教材
- ・ 各章は、スライドと解説で提供

受講対象者

- ・ 図書館、IT部門、研究支援部門の職員（URA）等
- ・ オープンサイエンスやRDMに関心のある教職員

<http://id.nii.ac.jp/1458/00000023/>

「RDMトレーニングツール」の構成

章	内容
第1章 導入	研究データ管理の重要性が増している背景や、研究データ、研究データ管理の定義について学ぶ。
第2章 データ管理計画（DMP）	効果的なデータ管理に欠かせないデータ管理計画に関し、作成義務化の動向や、その構成要素について学ぶ。
第3章 保存と共有	研究データの研究期間中の保管や長期保存に関する留意点について学ぶ。また、研究データの共有に関して、その意義や検討すべき点、共有方法について学ぶ。
第4章 組織化、文書化、メタデータ作成	研究データを長期的に管理・活用するために欠かせない、一定のルールに則ったデータの組織化や、データについて説明する文章やメタデータの作成について学ぶ。
第5章 法・倫理的問題	研究データをめぐる著作権や、再利用を促進するためのライセンスの仕組みについて学ぶ。あわせて、センシティブデータを取り扱う上での留意点や、研究倫理についても学ぶ。
第6章 ポリシー	国や助成団体、機関、学会等が、研究データの保存や共有を求めるポリシーを策定する例が増えており、これらの動向及びポリシー策定の要件について学ぶ。
第7章 研究データ管理サービスの検討	学習者が自機関での研究データ管理サービスを構築していくためのステップを学ぶ。

オンライン講座 「オープンサイエンス時代の研究データ管理」



- ・「RDMトレーニングツール」をベースにMOOC用に再構成
- ・動画を視聴し、選択式の問題を解く形式
- ・制作：国立情報学研究所
- ・協力：JPCOAR 研究データタスクフォース

<https://www.nii.ac.jp/service/jmooc/rdm/>

「オープンサイエンス時代の研究データ管理」の構成

週	内容
第1週：研究データ管理とは	<ul style="list-style-type: none">・ 本講座の背景とねらい・ 研究データ管理の重要性が増している背景・ 研究データ、研究データ管理の定義・ 効果的なデータ管理に欠かせないデータ管理計画・ データ管理計画をめぐる国内外の動向・ データ管理計画の実際
第2週：保存・共有・文書化	<ul style="list-style-type: none">・ 研究データの保管や長期保存・共有・再利用・ 研究データの組織的な管理・ データを文書にまとめる
第3週：メタデータ・法倫理的問題	<ul style="list-style-type: none">・ データにメタデータを付与する・ データの引用・ 研究データをめぐる著作権再利用促進のためのライセンス・ 研究不正研究倫理・ センシティブデータ
第4週：運用に向けて	<ul style="list-style-type: none">・ ポリシーとは・ 研究データ管理サービスとは？・ サービスの設計～学習者が自機関での研究データ管理サービスを構築するためのステップ

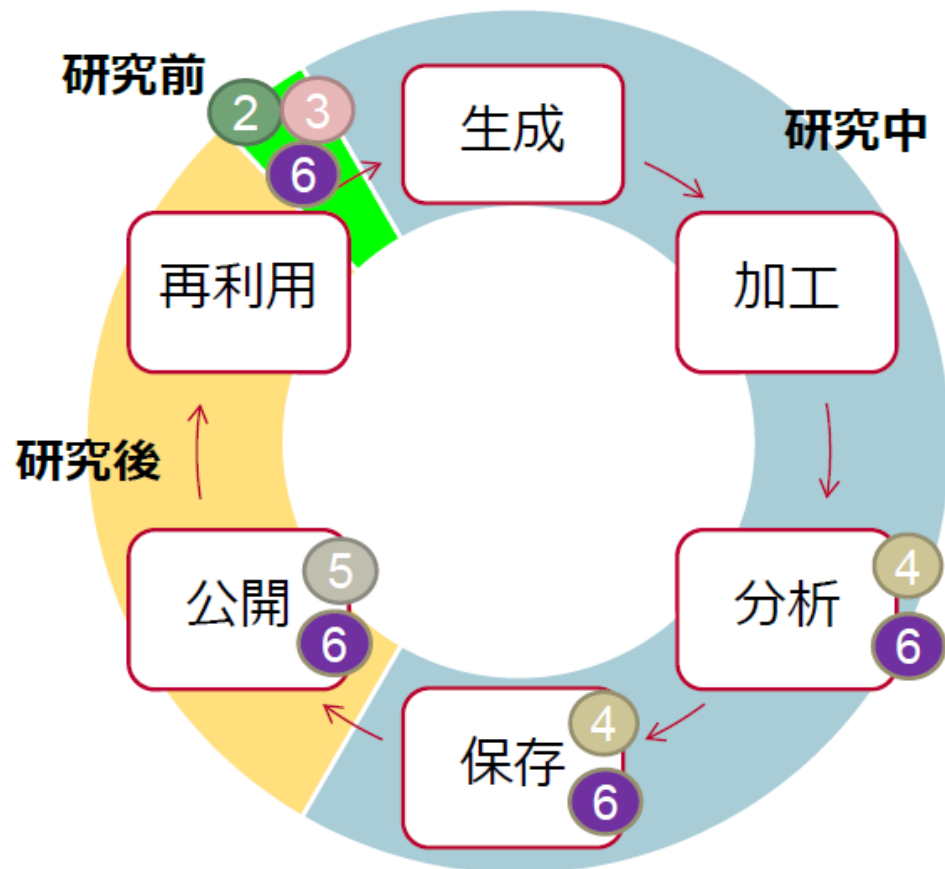
オンライン講座 「研究データ管理サービスの設計と実践」

- ・研究支援者（図書館員、研究支援職員（URA）、技術スタッフ等）のための教材
 - ターゲットの明確化
- ・研究プロセスや研究データのライフサイクル（研究前、研究中、研究後）に沿って、サービスの設計と実践について学ぶ
 - より実践的・具体的に
- ・NIIが開発中の新オンライン学習プラットフォーム（学認LMS）から公開
 - アクセス性の向上、機関管理機能等
- ・モニター機関を募った試用プロジェクトの実施
 - モニターからのフィードバックを踏まえて教材やシステムの改善

<http://id.nii.ac.jp/1458/00000107/>

研究データのライフサイクルとの関係

【研究データのライフサイクル】



【本教材の構成】

- 1章 序論
- ② 2章 サービス設計
- ③ 3章 研究前の支援
- ④ 4章 研究中の支援
- ⑤ 5章 研究後の支援
- ⑥ 6章 日常的な支援

- The UK Data Service, Research data lifecycle
<http://www.data-archive.ac.uk/create-manage/life-cycle>
- Mariette van Selm, RDM Support - basic training course for information specialists
<http://dx.doi.org/10.6084/m9.figshare.1285313> を元に加工

「研究データ管理サービスの設計と実践」 の構成

章	内容
第1章：序論	研究データ管理に関する基礎的な知識を学ぶ ・ 研究データ管理とは何か、・ 研究データ管理の重要性が増している背景 ・ 研究データ管理サービスとは何か
第2章：サービス設計	自機関の実情に合ったサービスを設計するために必要なことを学ぶ ・ 組織づくりや機関としての戦略やポリシーの立案 ・ Data Asset Framework（データ資産フレームワーク）の活用法
第3章：研究前の支援	研究者が研究を開始する前段階で、どのような支援が求められているかについて学ぶ ・ 研究者が遵守すべきポリシーとは何か、・ 研究資金配分機関等が求めるDMP（データ管理計画）の作成支援
第4章：研究中の支援	研究者が研究を実施している最中に求められる支援について学ぶ ・ 研究データの種類とセキュリティポリシーの関係、・ データの保存と機関の役割 ・ 利用可能なデータの発見方法、・ データの分析や可視化の支援方法 ・ 論文発表の際に必要とされるデータの取扱い、・ データ管理計画の見直し
第5章：研究後の支援	研究終了後に、得られたデータを公開することについて学ぶ ・ データの公開前に確認すべきこと、・ データの公開場所としてのデータリポジトリの選定 ・ 公開するデータに付与すべきメタデータ、識別子、ライセンスなど
第6章：日常的な支援	日常的な研究データ管理サービスについて学ぶ ・ 研修の実施方法、・ ポータルサイトの構築と提供すべき情報、・ 窓口業務の実施体制 ・ 広報のための資料作成やアドボカシー活動の展開方法

RDM教材の受容例

- ・ 土木学会認定e-ラーニング

<http://committees.jsce.or.jp/opcet/01e-learning/JMOOC>

土木学会の継続教育（CPD）制度における認定e-ラーニング講座の一つとして選定

- ・ 「統合イノベーション戦略2019」（2019年6月21日閣議決定）

<https://www8.cao.go.jp/cstp/tougosenryaku/>

「人材の育成及び研究データ利活用の実態把握」の事例として紹介

- ・ 「研究データリポジトリ整備・運用ガイドライン」（国際的動向を踏まえたオープンサイエンスの推進に関する検討会、2019年3月29日）

<https://www8.cao.go.jp/cstp/tyousakai/kokusaioopen/guideline.pdf>

基本知識を学べるオンライン教材の国内事例として紹介

「学認LMS」によるRDMに関する オンライン講座の試験運用（1）

- 「学認LMS」により、2つのRDM教材「オープンサイエンス時代の研究データ管理」「研究データ管理サービスの設計と実践」を提供



機関として受講状況の把握や分析も可能

- 通常版（動画）の他にebook版も提供
- 試験運用期間：2019年9月～12月（正式運用：NII、2020年度以降を予定）
- 参加機関：22機関（参加要件：学術認証フェデレーション「学認（GakuNin）」に参加し、IdPを構築していること。）
- 検証する事項
 - ① 学習管理システム「学認LMS」に関すること
 - ② 教材コンテンツに関すること
 - ③ 機関における講座運用に関すること
 - ④ 機関における組織的な研究データ管理支援体制のあり方

「学認LMS」によるRDMに関する オンライン講座の試験運用（2）

- ・ 2019年12月に参加機関による報告会を開催
 - ・ アンケート集計結果
 - ・ 通常版よりもebook版の評価の方がやや高く、全く動画を見ていない受講者も見られ、「映像教材である意味が薄い」という意見もあった
 - ・ 再生速度変更機能を使用している受講生が多く見られる
 - ・ 本講座への期待・満足度・有用性については肯定的な意見が多いが、否定的な意見は以下のとおり
 - ・ 本講座への期待に対しては「こういった層を対象にした教材なのかわからない」「動画である必要性が疑問」など
 - ・ 本講座への満足度に対しては「片方受講すれば事足りる」など
 - ・ 本講座の有用性に対しては「学習に手間取る」「内容が薄い」など
 - ・ 自由記述には学認LMSについての改善要望などが見られたほか、「内容が薄い」「国内の事例が欲しい」という要望が寄せられている
 - ・ 各参加機関の取組の情報共有

- 今回の教材のターゲットは若手研究者
- 既存の教材は受講に時間がかかりすぎ、研究者は利用しにくい
- 既存のRDM教材を分割して（マイクロコンテンツ化）、若手研究者向けに再構成
- 先行している千葉大学で開発中の教材等も参考に
- 2019年度の目標は
 - 現在の支援者向け教材をベースに、研究者が行うタスクと支援者が行うタスクを仕分ける
 - 他の「研究者向け教材」から、現在の支援者向け教材に不足しているコンテンツを洗い出す
 - 2020年3月末までに試行版を作成予定

2020年度のJPCOARの研修（計画中）

- JPCOAR参加機関対象の研修
- 基礎研修
 - オープンアクセス新任担当者研修（仮称）
 - これまで開催してきた「機関リポジトリ新任担当者研修」をリニューアル
 - 学術情報流通の概論、OA出版、RDM、オープンサイエンスの動向等の内容を盛り込む
 - 年2回開催予定
- 専門研修（他にも検討中）
 - ① JPCOARセミナー
 - JPCOARスキーマ、OAI-PMH、IIIF、DOI、ORCID等の学術コミュニケーション要素技術の解説、夏頃開催予定
 - ② 新JAIRO Cloud操作説明会
 - 秋以降、全国5会場程度開催予定

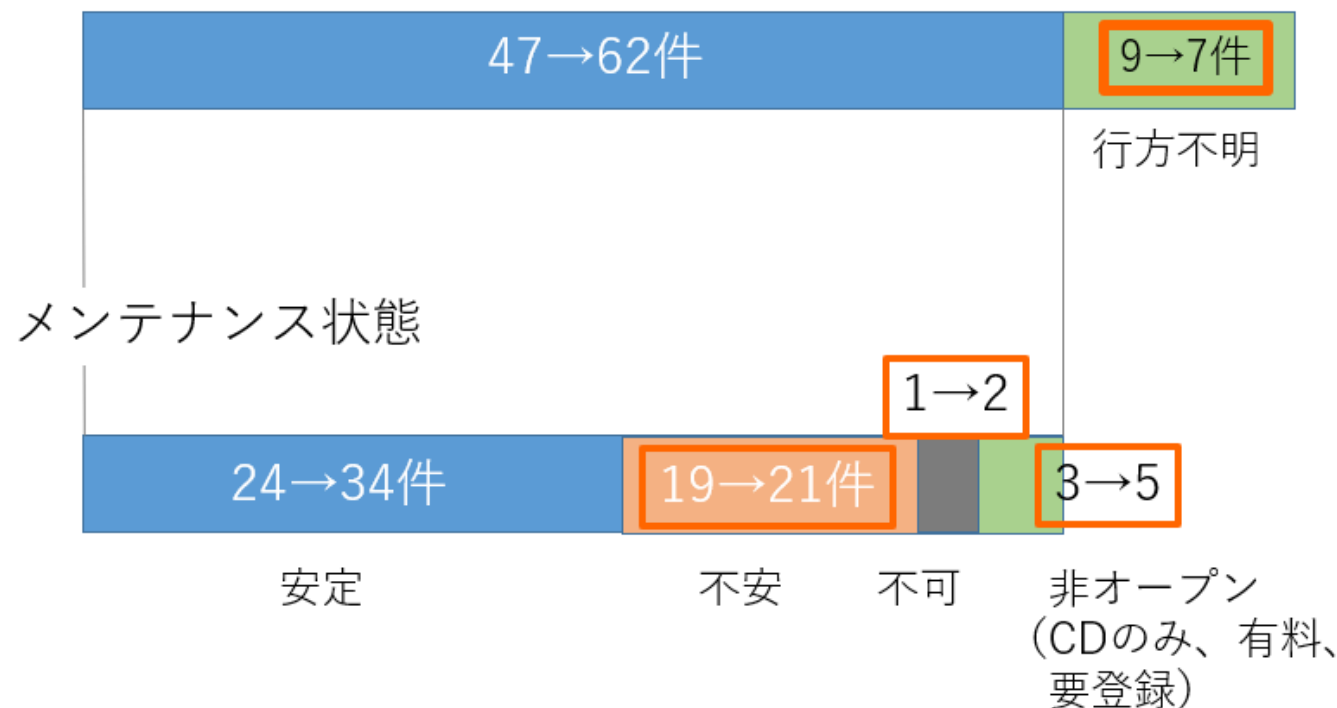
JPCOARによる 研究データに関する取組

失われゆく過去の研究データ

2016.5→[2019.3]

※助成されたすべてのデータベースのうち文系のもの75件
(2019.3時点で公開69件、準備中6件【暫定値】)

URLが生きている／移動している

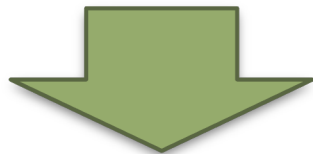


- 「KAKEN: 科学研究費助成事業データベース」で平成21～23年度採択分（文系）を調査した結果
- 2016年及び2019年に調査
(京都大学・天野氏による調査)

科研費の助成を受けて作成された
データベースの半分が適切に継続管理されていない

データベースレスキュープロジェクト

管理・維持してきた研究者等がいなくなると継続が困難



機関リポジトリ等がその受け皿になる可能性を模索

・2019年度の研究データ作業部会の活動

(プロジェクト参加の作業部会員が所属する機関において)

- ・レスキューするデータベースの具体的な選定
- ・各機関でリポジトリへの登録を進める
- ・課題の集約と整理
- ・ケーススタディの結果を簡単なレポートにまとめる

レスキュー事例

- 「矢内原忠雄文庫植民地関係資料画像データベース」 （琉球大学附属図書館） ※2017年度JPCOARレスキュー事例
<http://manwe.lib.u-ryukyu.ac.jp/yanaihara/>
- 「北の息吹：日本の魅力的なワイルドフラワー500種」 （北海道大学附属図書館）
<https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/html/2115/68332/Blessings-from-the-Northern-Island.html>
- 「ピラネージ画像データベース」 （東京大学学術資産アーカイブ化推進室） ※デジタルアーカイブでレスキューした事例
<https://iiif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/piranesi/page/home>

RDM事例形成プロジェクト (AXIES-RDM部会との連携事業)

- 目的
 - 参加機関によるRDM取組を支援、データポリシー策定の足掛かりに
 - ディスカッションやワークショップを通じて事例集を作成・公開
 - AXIES-RDM部会とJPCOAR研究データ作業部会が連携して実施
- スケジュール（予定）
 - 2019年度 関心表明受付、各機関の計画概要を取りまとめ等
 - 2020年度 各機関で実施、情報交換会、AXIES年次大会で中間報告
 - 2021年度 ワークショップ開催、事例集作成、AXIES年次大会で結果報告
- 担当
 - JPCOAR側は「研究データの公開・発信、利活用促進、長期保存・説明責任」に関する事例の集約等を担当予定

JPCOARスキーマ (1)

「JPCOARスキーマ」は、日本の機関リポジトリで標準的な「junii2」に代わる次世代のメタデータ規格としてJPCOARが策定し、2017年10月に公表

- 目的：日本の機関リポジトリのメタデータの国際的な相互運用性を向上させ、日本の学術的成果の円滑な流通を図ること
- JPCOARスキーマ策定の基本方針
 - オープンサイエンスおよびオープンアクセス方針への対応 ⇒ 研究データのメタデータスキーマ策定
 - 識別子の拡充に伴うメタデータ構造の修正
 - 国際的な相互運用性の向上
- JPCOARスキーマへの対応状況
 - 2019年3月 ジャパンリンクセンター (JaLC)、CiNii Articles、医中誌
 - 2019年4月 新IRDB (学術機関リポジトリデータベース)
 - 2020年10月 新JAIRO Cloud (予定)
 - (対応中) CiNii Research

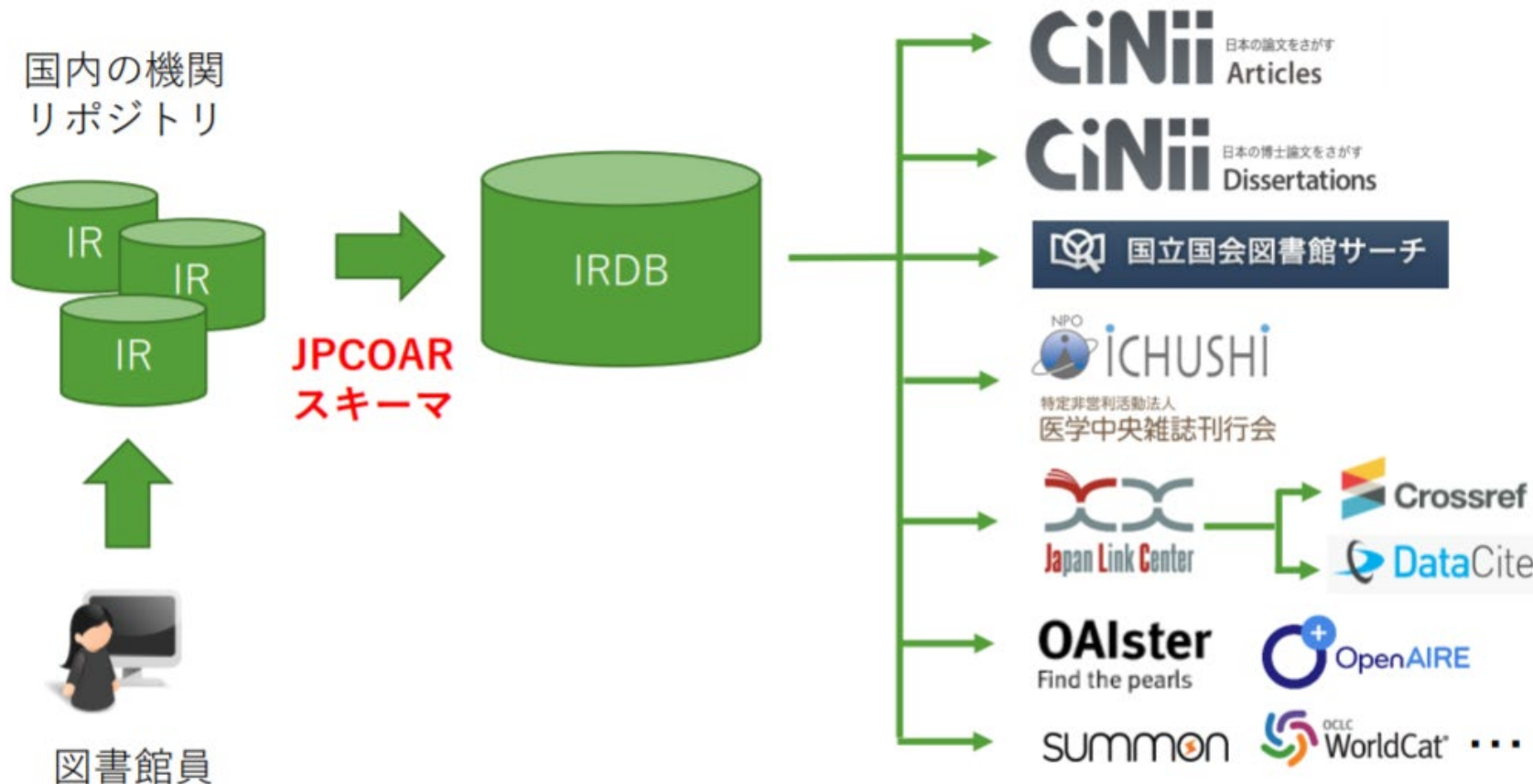
(参考) 「JPCOARスキーマガイドライン」 <https://schema.irdb.nii.ac.jp/>

(参考) 「JPCOARスキーマの策定：日本の学術成果の円滑な国際的流通を目指して」 <https://doi.org/10.1241/johokanri.60.719>

JPCOARスキーマ (2)

①各機関リポジトリからIRDBに
メタデータをハーベスティング

②各種のサービスにデータを流通



図は、以下の資料からの引用

片岡朋子「JPCOARスキーマが支えるデータ引用」、Japan Open Science Summit 2019

https://japanlinkcenter.org/rduf/doc/joss2019_rdc_05.pdf

AXIES-RDM部会の取組

大学ICT推進協議会 (AXIES : Academic Exchange for Information Environment and Strategy)

- ・ 情報系センター教員を中心に運営され、教育・研究・事務・マネジメントのための総合的な大学ICTの協議の場として、2011年2月に一般社団法人として設立
- ・ ビジョン：ICTを利用した高等教育・学術研究機関の教育・研究・経営の飛躍的強化
- ・ ミッション：ICT利活用による「効果的・多様な教育の実現」「研究推進環境の構築」「機関経営の改善」
- ・ ストラテジー
 - ① 共通技術基盤・組織基盤の構築・維持
 - ② 方法論と支援するツール群の開発・共有
 - ③ 教員・職員・学生のICT利活用力強化
 - ④ 幹部・サポートスタッフの養成とキャリア形成
- ・ 正会員（大学等）：120機関、賛助会員：69社

AXIES-RDM部会とは

AXIES研究データマネジメント（RDM）部会

- ・ AXIESに現在13ある部会のうちの一つ、2017年5月設立
- ・ 目的：大学・研究機関での研究の管理と利活用に関する諸問題を取り扱う。大学の研究者、情報基盤設計者、大学執行部、資金配分機関、オープンサイエンスを推進する研究コミュニティ等、多様なステークホルダーからの情報収集、議論の場を設けることで、研究活動のライフサイクルに沿った、データの収集、生成、活用、保管と公開のためのICT基盤の在り方を提言する。
- ・ 主査：青木学聡 准教授（京都大学）
- ・ 2019年5月「学術機関における研究データ管理に関する提言」公開
- ・ 2020年1月
「大学における研究データ管理に関するアンケート（雛形）」公開

「学術機関における研究データ管理に関する提言」

- ・学術機関における研究データ管理に関する提言
学術機関が踏まえるべきRDMの理念や考え方を提言

<https://axies.jp/ja/qruv9l/7ce3mg>

- ・付属文書

- ・目的・効果

- ・Ⅰ. 研究データ管理における学術機関の役割
 - ・Ⅱ. 学術機関における研究データ管理の導入目的の実際
 - ・Ⅲ. 学術機関が管理・提供する研究データと利活用の場面

- ・方法・機能・維持管理

- ・Ⅳ. 学術機関における研究データ管理を成り立たせる条件
 - ・Ⅴ. 学術機関における研究データ管理のための仕組み
 - ・Ⅵ. 研究データ管理のためのデジタルプラットフォームの機能要件
 - ・Ⅶ. 研究データ管理のための人材育成

学術機関における
研究データ管理に
関する提言

AXIES 大学ICT推進協議会
2019年5月1日

RDMアンケート雛形作成（1）

2020年1月「大学における研究データ管理に関するアンケート（雛形）」公開

<https://axies.jp/ja/SIG/activity/tk9pr9/07pbmo>

【アンケート雛形の質問内容】

1. RDMの国内外動向の認知度（※国内外動向は冒頭で説明）
2. 研究データ保存についての学内規程の認知度
3. 研究データの保管場所
4. 研究データのバックアップの有無
5. 過去10年以内に公表した論文の根拠データの保管・アクセス
6. 大学提供環境で保管したい研究データの有無・データ規模・データタイプ
7. 公開可能な研究データの有無・データ規模・データタイプ
8. 研究データの公開・共有の有無
9. 大学提供環境での研究データ管理への期待
10. 研究データ公開への期待

RDMアンケート雛形作成 (2)

- 2019年8月
先行実施した名古屋大学のアンケートを元にアンケートの雛形案を作成
- 2019年10-12月
京都大学・広島大学・大阪府立大学・北海道大学でアンケートを実施
- 2019年12月
AXIES年次大会@福岡で各大学のアンケート実施結果報告
- 2020年1月
「大学における研究データ管理に関するアンケート（雛形）」公開
- 2020年3月
情報処理学会IOT研究会@名古屋でも本取組を報告予定
「研究データマネジメントに関する研究者アンケートの設計と実施」

北海道大学におけるRDMアンケート

- ・実施主体：情報基盤センターと附属図書館の共同実施
（研究担当理事と研究推進部の了解を得て実施）
- ・実施期間：2019年11月11日～11月25日の15日間
- ・対象：全部局の教員
- ・回答数：269名（うち教員は247名、全教員の約12.2%）
- ・実施方法：ウェブフォームによる回答（LimeSurvey）、任意の記名式
- ・設問数：AXIES-RDM部会雛形案（10問+自由記述）+図書館追加（1問）+情報基盤センター追加（2問）の計13問

「北海道大学における研究データ管理に関するアンケート実施報告」
（2019年12月のAXIES年次大会での報告内容、HUSCAPで公開）

<http://hdl.handle.net/2115/76314>

国大図協OA委員会の取組

国大図協とは、OA委員会とは



- 国立大学図書館協会：国大図協（Japan Association of National University Libraries：JANUL）
 - 全国86の国立大学、放送大学および5つの大学共同利用機関、計92の図書館を会員とする組織で、会員間の緊密な連携と協力により、図書館機能の向上を支援するとともに、広く学術情報資源の相互利用の推進、学術情報流通基盤の発展に貢献し、もって大学の使命達成に寄与することが目的
- 国大図協全体としてのオープンサイエンス・RDMに関する取組
 - 2019年3月12日「国立大学図書館のオープンサイエンスへの取り組み」公表
 - 2019年6月21日 第66回総会研究集会@岡山
テーマ「大学図書館のオープンサイエンスに向けた取り組み」
 - 2020年1月15日「オープンサイエンスの推進に向けた協会の行動計画」公表
「アドボカシー活動の推進」「人材の育成」「先導的事業の推進」について短期・中期に分けて計画
- オープンアクセス委員会（OA委員会）
 - 目的：多様化する学術情報のうち主として大学が生産する教育研究成果の発信及びオープン化と保存に取り組み、大学における教育研究の進展及び社会における知の共有や創出の実現をはかる。

「機関リポジトリの再定義について」

- ・ 2018年度にOA委員会が案を作成、2019年6月総会研究集会の議論を経て公開

<https://www.janul.jp/ja/projects/oa>

- ・ 新たな定義

大学や研究機関などで生産もしくは保有する知識、情報、データをデジタル情報として公開することで、障壁なきアクセスを可能とし、その利活用を促し、新たな価値を創出する知識基盤

- ・ 従来からの①や②だけでなく、今後は③や④にも取り組む必要がある

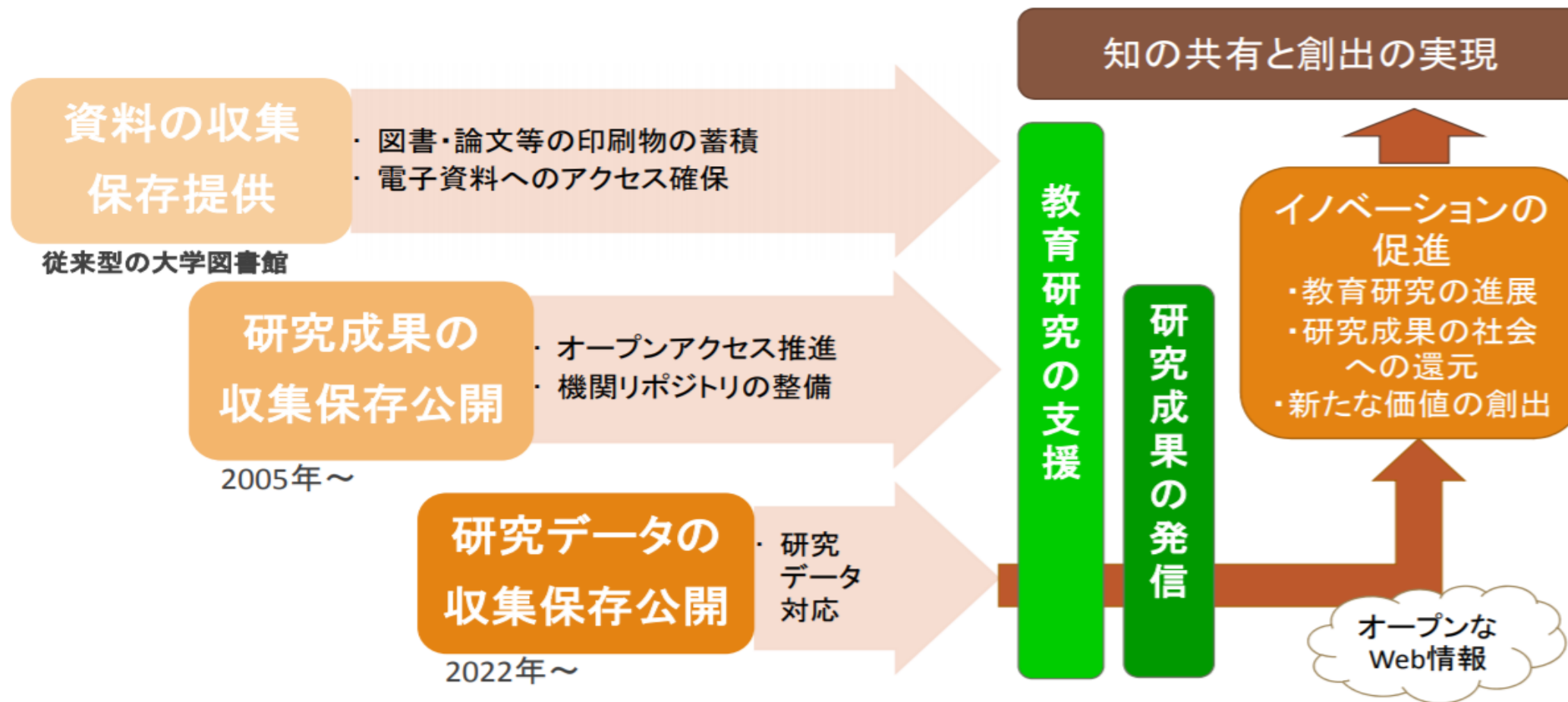
- ① 商業流通されている学術文献
- ② 大学の活動で生み出される学術文献
- ③ 研究データ
- ④ デジタル化された研究資料

「オープンサイエンスに向けて 国立大学図書館が担う具体的役割」

- ・ 2018年度にOA委員会が案を作成、2019年6月総会研究集会の議論を経て公開
<https://www.janul.jp/ja/projects/oa>
- ・ 内容
 - ① 各会員館（国立大学図書館）の役割
 - ・ 図書館が担う具体的役割の変化・拡張を、従来の図書館業務の文脈に沿って例示、各大学の教育研究支援体制に応じて各役割を取捨選択
 - ② 全会員館共通の取組
 - ・ 学術論文やデータ等の学内資源の安定的・継続的な保存・公開のため、セーフティネットとしても、機関リポジトリを活用を明記 → 「機関リポジトリの再定義」
 - ③ 協会としての取組
 - ・ オープンサイエンスを支える人材の育成と確保
 - ・ 先行的取組事例の把握・共有
 - ・ 協会としての対外的な活動

「オープンサイエンスに向けて 国立大学図書館が担う具体的役割」

オープンサイエンス時代の図書館の役割



「研究者に対する研究データ調査 項目リスト（案）」の作成

「オープンサイエンスに向けて国立大学図書館が担う具体的役割」において、
「各会員館は、先ず自らの大学で行われている研究の特性を正しく把握する
ことから始めることが肝要である」と記載

調査方法は、アンケート調査と個別インタビュー調査の2段階を想定

① アンケート調査

- ・ 自機関の研究データの実情を全体的に把握するとともに、研究データに関心の深い研究者を捕捉することを目的
- ・ AXIES-RDM部会の「RDMアンケート雛形」の利用を推奨し、追加した方がよい調査項目を例示

② 個別インタビュー調査

- ・ アンケート調査で捕捉した研究者に対し、研究分野に応じた個々の事情を詳細に把握し、今後図書館として研究データ管理にどのように関与し、取り組んでいくべきか判断する材料とすることを目的
- ・ 「個別インタビュー調査（雛形）」も用意

教員向け資料「研究データのオープン化の具体例とそのメリット（仮称）（案）」の作成

- ・事業計画

各大学におけるオープンサイエンス推進のため、研究データのオープン化の具体例を示すとともに、そのメリットを説明する資料（ポンチ絵等）の作成

- ・資料の内容（検討中）

- ・個別インタビュー調査の際に、研究データのオープン化の具体例やメリットを示し、理解を得られるような資料を作成したい
- ・また、研究データのオープン化に関する様々な誤解も解く資料としたい

- ・現在、OA委員会事務局で叩き台を作成中

- ・今後、OA委員会で議論し、2020年3月末までにまとめる予定